

自閉症

3年A組 M.S.

もくじ

概要

- 第1章 自閉症とは何か？
 - 1節 自閉症なのか？
 - 2節 これが自閉症だ
- 第2章 情緒障害ではない
 - 1節 特徴
 - 2節 脳の異常
 - 3節 病因
- 第3章 生後1年
- 第4章 自閉症児の言葉
 - 1節 役目を果たさない言葉
 - 2節 独自の言葉の発達
 - 3節 自我の芽生え
- 第5章 プログラム
 - 1節 宇宙人？
 - 2節 こだわり
 - 3節 I F ~ T H E N ~
- 第6章 こころ
 - 1節 アンとサリー
 - 2節 こころをみる
- 第7章 歩く
 - 1節 身体にみられた以上
 - 2節 足の裏の異常
 - 3節 一緒に歩けない
- 第8章 記憶力
 - 1節 情報の圧縮
 - 2節 数唱問題
 - 3節 イディオ・サヴァン
- 第9章 時間
 - 1節 デジタルとアナログ
 - 2節 3人称敵な時間と1・2人称的な時間
 - 3節 カレンダー
 - 4節 カレンダー記憶の能力

第10章 自閉症者と私たち

文献

あとがき

概要

自閉症とは、どのようなものかご存じだろうか。最近話題にされている自閉症をどのくらいの人が正しく理解できているのだろうか。

1943年そして1944年にアメリカの小児精神科医カナーとオーストラリアの小児精神科医アスペルガーによって相次いで自閉症が報告された。しかも「Autism」というまったく同じ病名を用いて・・・

1970年代まで、親の育て方（愛情不足や過保護など）によって発症するものであると間違っているとらえられていた。しかし今は、決して育て方の問題によるわけではないことが最近の研究でわかった。

自閉症とは、現在では、出生前もしくは出生後のごく初期に発生する発達障害の独特なタイプであると考えられている。

自閉症の見せる融通のきかなさ、混乱したときに示すパニックなどは、健常者にもその面影が認められる。それらの行動は、特定の条件に限っていえば、私たちの生存に欠かせないものでさえある。私たちは、発達の分岐点でかろうじて「正常」の道を選ぶことができたので、このような行動のメカニズムを調節できるようになっただけである。

このように簡単に自閉症の説明をしても実際に自閉症者にとって会ってみたいことにはわからない。玉井収介氏が記したように、自閉症とは「考える」世界のものではなく、「感じる」世界のものだから、知・情・意の中の「情」の部分を「知」で表現し、「情」に訴えようとするものなのである。だから、これから自閉症者との隔たってしまった距離を縮めていきたいと思う。

第1章 自閉症とは何か？

1節 自閉症なのか？

自閉症のイメージといえば、文字通りの「自ら閉ざす」から、人付き合いの少ない人、あるいは無口な人、孤独な人というようなところだろう。

ある子はもう2年も学校に行っていない。自分の部屋に閉じこもり、家族とも口をきかず、食事も別にとる。家族が寝静まった夜中に起きてきて、何か作って食べたり、風呂に入ったりしている。たまに学校の先生が来てくれても押入に隠れてしまう。

またある子は、必要最低限のことは口をきくが、家でも家族でない人が来ると黙ってしまう。学校へ行くとまったく口をきかない。最初は口をきかないだけであったが、今では動作

もしない。座ったり、教科書もノートも開けない。

彼らは、要するに、人と関係を持たないのである。彼らが自閉症であるといえるのだろうか？

2節 これが自閉症だ。

彼らは自閉症ではないと断言してもいい。なぜなら、明らかに人を避けているからである。関係が全くないわけではないのだ。わかりやすくいうと、マイナスの関係があるのだ。

しかし、自閉症にはプラスの関係もマイナスの関係ものいのだ。0なのだ。たとえば、自閉症児と向き合ったとしても、プラスもマイナスもどちらの関係も持つことができない。ある子は、両親の特徴のある絵を見せても、父母であることはわかるが、本当の両親の顔を見るとそれが誰であるかわからなくなってしまう。このように自閉症とは、とても不思議な世界なのである。

第2章 情緒障害ではない

1節 特徴

自閉症の特徴は次のようなものである。

1. 生後30ヶ月以内に発症する
2. 社会的発達に障害がみられる
3. 言語発達に遅れとかたよりがみられる
4. 行動の同一性への固執がみられる

もっとわかりやすくするために、自閉症の特徴をあげてみよう。

1. 他人と関係を持たないこと、持てないこと
2. 言葉の発達が悪い
3. 会話の発達が著しく悪い
4. 他人との感情のつながりをもてないこと
5. 言葉がコミュニケーションの道具の役割をもたないことが多い
6. 儀式的な行動（物をクルクル回すなど）を繰り返し、人々と同じ生活のサイクルの中に入ってこないこと

しかし、いくら詳しく書いたところで、実際に自閉症者に会ってみたいことにはわからないのである。

2節 脳の異常

第1章で例に出した「ひきこもり」。これは、まわりの世界についていけなくて、自らひきこもってしまった人たちである。そうすると、自閉症者はどうなるのだろうか？

自閉症第1発見者であるカナーは、自閉症児の治療方針として、木津ついた心のケアの

ため遊技治療法などによって自由に活動させ、同時に、両親に対する入念な面接を行った。しかし、治療に取り組む人たちは、自閉症児たちが何か行動の基本のようなものができていない子供たちであることに気づき始めた。そこで、脳障害説が登場したのだ。この仮説が決定的なものとなったのは、自閉症児たちの両親が必ずしも「冷たい人」ではなく、子育て上手な母親だったりしたことだ。そしてなによりの理由は、自閉症児にてんかん発作が現れたり、脳波に異常が見られたからだ。

脳の障害説により「ひきこもり」とはちがひ、自閉症は自ら選んだものではないということがわかった。さらに、神経生理学的な研究において、自閉症者の脳では、言語や認知の働きをつかさどる皮質部に損傷が確認されることはめずらしく、もっと脳の深い部分(ヒトの欲望や感情や基本的な社会行動の発生源)に問題があるというデータが提出されるようになってきた。

3節 病因

自閉症の病因は、脳の形態異常によるもの、風疹など感染症によるもの、フェニルケトン尿症など先天性代謝異常によるもの、虚弱×染色体症候群のような染色体異常によるものなど、数十から数百に及んでいる。まだ、確認されていない病因もあるが、それらを含め「病因＝症状」というイコール関係は結ばれない。それは、同じ病因が様々な障害へと姿を変えていくからである。

第3章 生後1年

人の脳は、その構造から自閉症を生み出すような因子を持っているのではないか？人は他の動物とはまったく違った生後まもなくの特有の育ち方から見たとき、自閉症の成長過程にこそ本当の謎がかくれているのである。

我が子の自閉症診断の後、両親が子供の幼児期の印象としてよく発する言葉が「落ち着いた」「おとなしかった」「扱いやすかった」というものだ。

自閉症の子どもは自閉症の診断にもあるように、生後数ヶ月のうちにその症状を表す。その症状というのが前にあげた「落ち着いた」「おとなしかった」「扱いやすかった」といった「何の世話もいらないまったくのよい子」である。さらにいくつか特徴をあげるとすれば、なんとなく目がうつろであったり、ミルクを与えたり抱っこしたりするときに普通の子と同じように協力的な動きをしてくれない、といったところだ。赤ちゃんの頃というのは、どちらかというとも本能的ともいえる行動をするものである。しかし、自閉症の赤ちゃんはまったくそのような行動をしない。すなわち、人として本来持っているものの何かを欠いたままで生まれてきてしまったのだ。

他のほとんどのほ乳類が生まれたその日のうちに立ち上がり、歩き始めるというのに人間の子どもは、生後1年間も横たわったままだったり、ぎこちなく這いまわったりするだけの

とても頼りない生活を送っている。そんな、生後1年かが不自由であるからこそ、その後の発達が飛躍的なものとなる。そして、ここで親たちが我が子の異変に気づき出す。健康な子どもと自閉症の子どもとでの行動の差があらわとなるからである。

第4章 自閉症児の言葉

1節 役目を果たさない言葉

自閉症児は言葉の発達が著しく悪い。中には、まったく会話のできない子も少なくない。しかし、会話がちゃんとできる子もいる。彼らを説明するには彼らの言葉には独自の発達があるとえばよいだろう。具体的には、コミュニケーションの役割を果たさない言葉が存在したりする、ということである。これでは、話すにも話せない。会話が成り立たないのも自然である。

2節 独自の言葉の発達

伝える必要がなければどうなるか？コミュニケーションの道具とならない言葉は、独自の言葉の発達をとげるのは前にも行った通りである。言葉だけでなく文字や数字も伝達するための道具にはならない。自閉症児1人の世界のおもちゃとなる。一番簡単な例は当て字である。

酒（朱） 軍上（群青） 王土（黄土）
曹毛（象牙） 古化茶（こげ茶）

前の字が当て字で（ ）の中の字が本来の字である。色の名前を書いているわけだが、当て字だけ見るとなにを書いているのかわからないに違いない。

創作単語もあり、これになると私たちにはもっとはかりにくくなる。

音が下（音がした） 立ちど（立ち止まる）
22じ（つつじ） 82で（やつで）

さらに進むと、図1のように自分で文字までも創作し出す。図2は実際には存在しない文字に画数や部首などをつけて辞書のようにしている。このようなことを自閉症児はよくしている。辞書、電話帳、住所録、時刻表など文字であって文章でないものによく興味を示すのである。

次の創作算数になると、第三者にはさっぱりわからなくなる。

$$\begin{array}{ll} 4 \times 0 = 4 & 4 \times 1 + 0 = 4 \\ 4 \times 1 = 9 & 4 \times 2 + 1 = 9 \\ 4 \times 2 = 14 & 4 \times 3 + 2 = 14 \\ 4 \times 3 = 19 & 4 \times 4 + 3 = 19 \end{array}$$

矢印の前の数字の並び方から推測すれば、おそらく矢印の後の計算式になるだろう。要するに、彼らは文字や数字に対しては、その発音とか加減とかの操作することだけに興味を集中しているのだろう。

3節 自我の芽生え

2歳頃の健康な子どもは「 ちゃんの」といったように所有権を表す言葉をよく使うようになる。そして、外部の世界の占有権を巡って、次第に「私」の存在を自覚していく。

一方、自閉症児は2歳頃のこの時期「超然」としていて誰かと所有権をめぐるケンカすることもない。だから、その分、「私」という存在を自覚できない、不確かな状態である。自閉症者とは「自閉」という言葉で表されているが、本当は自分と他人の区別がしっかりできていない「私」の芽生えが遅れている人々なのである。

第5章 プログラム

1節 宇宙人？

「まるで宇宙人と一緒に暮らしているようなものです」ある自閉症児を持つ父親がこういった。

私たちは、何をするか、どこに行くか、絶えず自分に問いかけながら行動している。そして、問題が出てくると、いろいろ案を出しながら、もう一度行き先を確認する。このようなことを「行動のプログラミング」といい、この過程が自閉症児には欠けているのではないだろうか？

「どこに行きたいの？」とか「何をしたいの？」という答えが無数にある質問を自閉症児は苦手とする。具体的に「パン屋さんへいく？」とか「パズルする？」という選択肢を与えてやると答えることができる者が多くなる。

2節 こだわり

今述べたのとはまったく反対に、自閉症児はプログラミングが得意であるという一面もある。道順や物事の進む順番をよく記憶していて、それを固く守ろうとする態度が見られるからだ。たとえば、スーパーへ行くのにいつもと違う道を通ろうとすると、自閉症児は激しく抵抗し、ときにはその場に座りこんで泣き始めたりする。また、物事の進む順番へのこだわりは、給食を食べる順番、時間割を守る、帰宅後の時間の過ごし方の順番などがよく見られる。

だが、彼らが守ろうとする「順番」は、彼ら自身が組み立てたプログラムではないように思える。自閉症児の行動の順番は、彼らの敏感なこころの内側に入ってきた刺激に強い印象を受けて、それより後の行動は、その印象に基づいて決定していく傾向があるようだ。日常的な出来事の順番やどこかに行くときの道順をいつのまにか自閉症児の脳裏に焼き付いてしまっているようだ。そして、誰かがそれに反する行動をすると、パニック的な反応を示す。この物事の「順番」へのこだわりは、自閉症児の優れた記憶力の所産であり、プログラムの所産などではない。健常者なら状況に合わせて行動計画を変更できる。しかし、自閉症児にはそれができていないから誰かのプログラムを自分のものとし、堅持しようとするのである。

3節 IF～THEN～

どんなときにどんなことをしなければならないのか。人間を含めて動物の脳にはこのようなルールが無数に組み込まれている。雨が降れば傘を差す。部屋を出るときにはドアを閉める。つまり、状況によって行動が生み出される。このようなルールを「状況・行動規則」と呼び、また、コンピュータのプログラム風に表すとIF～THEN～となる。実は動物はいろいろな状況に適応して行動しなければならないので、非常に多くのIF・THENルールを持っている。巣作りするときのミツバチの行動や、狩りをするときの肉食動物の行動は、実に精巧に出来たIF・THENルールの複合なのである。

自閉症児に話を戻すと、プログラミングを苦手とする彼らはIF・THENルールができていないのか、と思うかもしれないが、必ずしもそうではない。道順をよく記憶していたり、物事の時間における順番を守ろうとする。これは自閉症児の多くに立派にIF・THENルールが存在することの証拠である。つまり「スーパーに行くならばこの道でいく」というようにルールを作り上げていたのだ。それにも関わらず、彼らの行動が宇宙人ではないかと思わせるほど異常に見えるのは、私たち、つまり自閉症でない人々のIF・THENルールがけして簡単ではないからだ。

しかし、このIF・THENルールを守ろうとする行動の傾向を利用して、自閉症児の教育がなされている。具体的には、ある状況である行動をしたならばご褒美がもらえる、というパターンを基本とした指導方法、すなわち「オペラント教育」とか「行動療法」とか呼ばれるアプローチが利用されているのである。

けれども、オペラント教育では、簡単なIF・THENルールしか形成されにくいところがある。人間の行動の多くは行動の目標が次に行動する手段となっていたりするため、そこにご褒美があるのかわからないところがある。課題をやり遂げることで自分がご褒美となっていることも多く、自閉症者が順番など身につけたIF・THENルールに対してこだわるといことは、行動ルール自体が人間にとってのご褒美となりうる証拠だと思われる。

問題は、自閉症児が状況に合わせて、分岐のある長い道のりを進んでいけないところにあ

る。人間をのぞく動物は「AならばB」というパターンで行動がつけられることが多い。つまり、本能的行動と呼ばれるものでA B C D・・・というようなとてつもなく長い行動の連鎖によってできているものである。しかし、本能的行動に比較的強く依存しながら生きていけるのは、同一環境のもとで一生涯をおくることになる。あくまで人間を除く動物においての場合のみである。さまざまな環境のもとで暮らすことになった人間だけはA B C D・・・と一直線に進むわけにいかず、節目ごとに立ち止まり、方向を確かめながら行動していかないとはいけなくなってしまったわけである。

第6章 ころ

1節 アンとサリー

最近の自閉症研究の中に「ころの理論」という概念に注目したものがある。私たちは、「あの人ならこう思うだろう」とか「この人はこんなことは知らないはずだ」というように、いつも他人のころの中まで判断しながら行動している。つまり、ころの法則のようなものに気づいて、自分なりの「ころの理論」がつけられている。ところが、自閉症児はかなり高い知能の持ち主でも「ころの理論」らしきものを持っていないと考えられている。

たとえば、バロン・コロニーという人が行った有名な「アンとサリーの実験」という2体の人形を使った研究がある。この実験は、最初に被験者に簡単な人形劇を見せる。サリーがかごの中にしまったビー玉を、彼女が留守の間にアンが箱の中へ隠してしまった。さて、帰ってきたサリーはどこを探すでしょう？という問題である。

知的障害児も含めてほとんどの児童はこの劇の中で「アンは意地悪だ」などと言って笑い「サリーはかごの中を探すに違いない」と確信をもって言い当てた。しかし、自閉症の子どもだけはどんなに知能レベルが高い場合でも、アンがビー玉を隠した箱の方を示したのである。

2節 ころを見る

なぜ、このような違いが出るのか？それは、自閉症児がアンとサリーのころが別々のものであることに気づいていないからである。

すると、ころがわかるということはどういうことか？それは、その人の行動がどういう風に進んでいき、どんな気持ちで、どんな知識内容をもっているかがわかることだ。

人のころを一番察しやすいときは、欲求がぶつかり合ったときである。たとえば、おもちゃを取り合うときだ。2人の行動のゴールはおもちゃで、そこには、相手のころも自分のころも映し出される。そこで今度は、相手に気づかれないようにおもちゃを取ってしまえば、相手のころの内容を自分のころの内容と別の状態にしておける。こんなことを繰り返していくうちに、次第に相手のころを察することができるようになる。

ところが、前に述べた通り、自閉症児は「超然」としていて、他の子どもとおもちゃを取

り合ったこともなければ、ましてや欲情がぶつかり合うというようなことを経験したことがほとんどない。障害を乗り越えて目標に到達しようとする中でこそ目的が吟味され、行動プログラムが練られるようになっていくのだと思うのだが、自閉症児にはこの種の闘争本能が不足しているように思える。また、彼らは策略家としての性質が乏しいので、ウソをついたり、人をだましたりすることができない。これも相手のこころが見えていない証拠である。

第7章 歩く

1節 身体にあらわれた異常

第5章で述べてきたように、自閉症者は行動のプログラムの立て方に問題があり、そのため、彼らの行動は私たちとはかなり違っていた。特に、息の長いプログラムにしたがって行動していない彼らは、長時間固定した姿勢を保ったり、歩き続けることができなくなる。そんな状態が10年20年続けば、身体を支えたり、動かしたりする筋肉に異常が生じてくるはずである。

おだやかな乳幼児期を終えた自閉症児は、3・4歳になると一転して多動になる。健康な子どもならそろそろ集団行動が増えてくるのだが、それとはかなり違って見える。

ところが、10歳を過ぎた頃から、動きは緩慢になり、寡動といわれる状態になることが多い。私たちが未だによくわからない、外部の刺激に触発されてさまよい続けた彼らの動きが止まったとき、その刺激に代わって行動を始動すべき自分自身のプログラムが欠けていたのである。「何をしてもいい時間」は彼らにとっては「何をしたらいいかわからない時間」であるので、彼らは次第に動きの乏しい時間をおくることになる。

2節 足の裏の異常

足の裏とは、私たちが直立している間体重を支える場所であり、また、つま先やかかとのバネによって運動を助ける場所である。このような働きをもっているから、その人特有の足の裏の形ができあがってくるのだらうと考えられている。要するに、足の裏は、その人の長い運動の歴史そのものなのである。

足の裏の測定には「足の裏博士」と呼ばれる平沢弥一郎氏の開発した「ピドスコープ」という装置を用いる。被験者の足の裏をしめらせて強化ガラスの上に立たせると、両側面から蛍光灯の光で接地面が白く浮き上がる。それをカブに45度で据え付けた鏡を通して写真撮影するのである。最近では、土踏まずの形成を見る目的などでよく用いられている。

何年か前に熊谷高幸氏が、このピドスコープを用いて、数十人の自閉症児の足の裏を測定した。その結果、自閉症児の足の裏は健康な子どものもものよりもはるかに高頻度に問題を抱えているということがわかった。

図3の写真ABCが自閉症児、Dが健康な子どもの足である。この中で自閉症児にもっとも多く見られるのがAタイプの足である。全体的に細長く、指のあたりの付きが悪い。そして、年長になるにつれて寡動になるとともに身体は肥満ぎみになる。それなのに、足の裏だけはこんな風に細くあらわれるケースがよくある。また、年少の自閉症児もよく動くように見えて、実は何もすることがないときはクニャリとした感じで横になっていることが多い。そのため、健康な子どものDのようにたくましいものとならないのである。

一方、B、Cの場合は外反足と内反足の例である。（図4参照）Bの足は一見、土踏まずのない扁平足のように見える。だが、この足の場合は、足首と足の裏をつなぐしょう骨が外側に向かって反っていて、体重がすべて内側にかかっている。

3節 一緒に歩けない

ある自閉症児の母親が、子どもの小学校入学を期に、子どもと徒歩通学を始めることにした。そして、彼女は「私は、あの子が本当は歩けない子なんだって初めて気がつきました」と言った。

これは、意味通りの歩けないではなくて、体を起こし、一定のテンポで人と歩調を合わせて歩くことができないということである。そして、最近になって、やっと少しの距離だが一緒に歩けるようになったという。

歩行とは、全身の協力的な動作を伴うものだから、大脳の統合的な活動を必要とする。だから、自閉症児の歩行は、障害の程度や克服のレベルが如実に表れているのである。

第8章 記憶力

1節 圧縮する力

音声による声は、私たちの感覚にとって非常に頼りない性質を持っている。それは次々に現れ、注意していないとすぐに消えてしまう。その上、言葉の意味は状況と関係しているので、音と状況の同時進行的な世界を見守り、関連づけないと理解されない。

自閉症児は、まわりで起きている出来事をしつこく追求しない。このことは、言葉とその意味をつくる世界の同時進行的な動きを捉えるには不利な条件となっているのである。しかし、文字言葉となると、音声とは全然違う性質を持つ。それは、決して消えていかず、目

の前にとどまる。また、時間的進行に従わなくても、前後どちらからでも接することのできる世界だ。

だから、自閉症児は漢字やひらがな、カタカナ、ローマ字。アルファベットに関心を示しやすく、ときには音声言語よりも早くに文字言語を習得することもある。彼らの特徴から言えば当然のことなのである。

ある自閉症児は、何種類かの物語を丸ごと暗記していて、ときどきそれをノートに書き始める。彼はまだ会話もできないのだが、物語を書き始めるととてつもない集中力を示し、一気に書き上げてしまう。けれども、「どんなお話だった？」と聞かれると内容をまとめられない。

脳の前頭葉生涯による力動失語症は、文を作れなくなるだけでなく、長い物語を短くまとめられなくなる。自閉症者の言葉には、この力動失語症と同じような特徴を持っている。

自閉症者の記憶の世界は、第1に空間的な構造に依存しているようである。第2に情報の圧縮ができないため、入ってくる情報を機械的に記憶することとなり、また、この能力については健常者をはるかにしのぐこともある。

自閉症者の知能構造は非常にアンバランスなものといえるのだ。

2 節 数唱問題

「数唱問題」とは、検査者がたとえば「7・2・6・8・・・」というように数を唱え、被検査者は直後にそのとおりの順番あるいは逆の順番でリピートする課題である。

このような条件だと人は、一般的には7くらいまでしか記憶できないことがG・A・ミラーによって証明された。これが「短期記憶」の限界である。しかし、自閉症者の中で一般的な7を上回る結果を出す者がいる。

素唱問題は先ほど染めしたように復唱七系列と逆唱七系列によって構成されている。逆唱になると、スピードがおち、成績も下がる、それが普通である。ところが、自閉症児は私たちとはまったく異なり、逆唱は正確で、スピードも復唱とほとんど変わらなかったのである。一番長い系列は逆唱すると次のようになる。

6・9・1・6・3・2・5・8

8・5・2・3・6・1・9・6

私たちがこれを逆唱しようとする、まず最初にそのままの順序で全体を覚えてから、後ろの方から2, 3の数をもとめては少しずつ逆唱していく。だから、時間がかかるし、また逆唱しているので、全体の系列が保持できなくなって間違えてしまうことが多い。

この自閉症児のように逆唱できる子もいれば、できない子もいる。ただ、最近行われた多数の自閉症児を対象とした検査では、自閉症児たちが、スピードの面でもやや健常児を上回る結果を出したのは事実である。

つまり、数系列は音声刺激としての時間的順序を追って読み上げられるものであるが、自閉症児は、それをイメージのうえで視・空間的に文字系列として処理している可能性がある。彼らには、刺激をできるだけ自分の処理しやすい形に変えつつ記憶している可能性があるようだ。

このように、健常者と自閉症者には、記憶方法にも違いがある。その結果、脳に蓄えられている知識の世界はかなり違ったものにちがいない。

3節 イデオ・サヴァン

健常者には、互いに似たような対象に注目し、似たような方法で記憶していくので、知的な財産も互いに照らし合しやすい。しかし、自閉症者の場合は、私たちとは違う対象に注目し、彼ら独自の記憶方法で記憶するので、その財産は公開しようがないのだ。だが、彼らが絵画や音楽の形をとって現れたとき、その世界は私たちにははるかにおよばないものとなることがある。これは「イデオ・サヴァン」と呼ばれていて、フランス語で「知能障害をもつ天才」という意味である。全般的に遅れた知能の中に孤島ともいえる才能が残されている状態を言う。18世紀末より、精神薄弱の様相を呈するにもかかわらず、計算や記憶力が優れていたり、1度聞いた音楽を楽譜も見ずに弾き当ててしまう人が存在することが報告されていて、現在では、自閉症者の約10パーセントに典型的なイデオ・サヴァンの特徴があらわれていると言われている。

第9章 時間

1節 デジタルとアナログ

機能よりも1ヶ月前は遠く、1ヶ月前よりも1年前はさらに長い。私たちはこの感覚をどのように身につけていったのだろうか？おそらく、現在からその時点までの間にある出来事の多さに応じて、また、出会った人の数に応じて、記憶の内容が次第に不鮮明になっていくことを感じるからではないだろうか。もちろん、出来事の数も出会った人の数も数えたものではなく、はっきり言って曖昧な量の感覚である。

ところが、自閉症者たちには、この曖昧な量の感覚、いわばアナログ的な捉え方が難しいようだ。

自閉症児エリーの母親は娘の特徴をこのように報告している。「今日、買い物に行かないと知って落胆しているエリーを慰めるためには『明日』と約束するよりも『金曜日』と言った方がいい。たとえ、金曜日が3日後であっても・・・『今すぐ』よりも『3時に』の方がききめがあるのだ。そして、金曜日になり、3時になるとちゃんと催促に来るのである。」このように、エリーは「昨日、今日、明日」だけでなく「すぐに」や「さっき」という世界も理解できない。これらは今を視点において、時間の流れの前方と後方をアナログ的な量に基づいて見たときの表現である。今の時間は絶えず変化しているため「昨日、今日、明日、

すぐに、さっき」と言った世界は特定できない、相対的な位置にあることになる。

特定できるとはどういうことか？これまでに何度も登場した I F・T H E N ルール、「A ならば B」の世界であり、したがって、自閉症者にはわかりやすい世界となるのである。

また、自閉症児テッドの父も息子が「もうすぐ」や「ちょっとしたら」を理解してくれないことを悩んでいた。ある日、父の買い物の間、イライラした様子でいるテッドに「もうすぐ」でなく「10分したらすむからね」と言った。すると、テッドは時計を見ながら「10時25分だね」と言って、落ち着きを取り戻した、という。

この特徴は、じへいしょうしゃの根底に持つ特徴につながる。このデジタル的な時間の捉え方は自閉症者特有である。

2節 3人称的な時間と1・2人称的な時間

1492年、コロンブスがアメリカ大陸を発見した。これは、私たちとは直接関係のない人が私たちが生まれるずっと前に起こした出来事であり、「3人称的な時間」の中で起こった事件である。

これに対して、私たちの今現在も経験している日常的な時間、たとえば、昼食をとっているのを今とすると、寝ていたのが「さっき」であり、レポートを書くのが「これから」である。そして、学校に行ったのが「昨日」で、終業式が「明日」である。このように、私たちが経験する日常的な時間は、私とまわりの人々が一緒に経験する出来事の連続的なつながりの中で測れるものである。これを「3人称的な時間」と比較する意味で「1・2人称的な時間」と呼ぶことにしよう。

ところが、この1・2人称的な時間の感覚が自閉症者には乏しいようである。理由は、彼らがもともと人々と1・2人称的な関係のもとでしかかかわっていないから、また、それに基づいて過去の出来事について語るができないからだ、と思われる。

私たちは、人と共有する過去の出来事について話し始めると、つい話が広がり、長びいてしまうものである。それは、私たちの話というものが、山脈の尾根をたどるようにして出来事のつながりを追うものだからである。しかし、自閉症者は、まわりの人々と共感的に出来事に参加しなかったため、彼らは、人々の中にあってもひとりぼっちだったのである。そこで、1人だけでも利用できる時間は、誰のものでもない3人称的な時間となった。

3節 カレンダー

私たちはケージの中のラットや植物の生育状態を観察するとき、何日何時何分何秒と明記する。これと同じように、自閉症者たちは、成長のある時期に他の健康な人々の世界に気づき、それを覗くようになったのだろう。そして、あるとき、その人々の暮らす世界に時計やカレンダーがあることを発見し、自分の世界に介入してくることのあるその世界の住人たちの動きを観察するために、こころ時刻をそこにある時計とカレンダーに合わせたんではないだろうか？

自閉症者が外部世界の動きを時計やカレンダーに関連させるようになると、こころの中でそれらの意味は私たち健常者の場合よりもずっと重要なものになるようである。彼らにとって、それは、今現在の時刻を知るためばかりでなく、過去にも未来にもかなり広い範囲でのスケジュールを管理するようになる。そうして作り上げられた彼らのこころの中のスケジュール帳をめくるスピードはときに電子手帳並となる。

4節 カレンダー記憶

熊谷高幸氏が、このカレンダー記憶の能力を検査した。そして、その結果、7人中4人、すなわち、過半数が10問すべて正解したのだ。また、1人は9問、残る2人も偶然による中率である7分の1と比べて偶然とは思えない結果を出している。そして、すべての者が、日付を言われると、何か考える様子も見せずに即座に答えを出してきたらしい。7人のうち2人は、その年1年のカレンダーをほぼ記憶していた。そして、他の5人は前後数年間もしくは数十年間にわたって日付から曜日を割り出すことができた。これは、私たちの一般的な記憶力をはるかに越えている。

ある自閉症児は特にこのカレンダー記憶に優れている。あるとき、「どうしてそんなことがわかるの？」と聞くと「見える」と答えたそうだ。それは、きっとかなり明瞭な像としてカレンダーのパターンが頭の中に入っている、ということだろう。

また、他の自閉症児においては、視覚的な方法だけでなく論理的方法も使用している。図5は彼が懇切丁寧な図解入りで曜日の割り出し方を教えてくれたときのものである。「僕が大阪から福井に引っ越したのが1981年、というわけです。・・・その年、小学校に入学した、というわけです。・・・その年のカレンダーが1970年に大阪で万博が開かれた年のカレンダーとすっかり同じ、というわけです。・・・そして、この1970年のカレンダーがすべての基調、というわけです。」「というわけです。」を何回も繰り返しながらしてくれた説明によれば、要するに、彼の場合は、1970年の1月から12月までのカレンダーをすべて記憶してしまったことからカレンダーの記憶の能力が芽生えたようである。

この2人のカレンダー記憶は、記憶する方法こそ違いますがカレンダーという二次元空間上を移動しながら曜日を探し当てた、というところでは共通している。数多くの自閉症者たちがカレンダーに詳しいのは不幸にも広がりをもった時の中を生きることができず、循環する時の平面を生きてきたためかもしれない。

第10章 自閉症者と私たち

「自閉症」の本質とは、また、それと比較させたときの「われわれ」の本質はどのような者か？両者の位置をできるだけ遠くから比較するために、ここでは人間の集団のことを動物学的な言葉で「群れ」として眺めてみることにしよう。

人間の言語や行動は、人間の群れの活動の中で強く強いられながら育っていくようである。健康な子どもは、その愛着的な感情に基づいて人間の群れに引き寄せられながら、徐々に人間の目的をもった行動の様式を身につけることができた。ただし、そのほとんどは、人間の群れの動きに従い、人々の動きを見よう見真似で自分のものにしようとする中で身につけられたものでないだろうか？

幼い子どものプログラムはきわめて不完全である。泣くことを要求表現として意味づけたり、なぐりがきを絵と高めながらプログラムの形を整えるのは、人間という群れの中の大人の役割である。したがって、人間は、群れの中で行動しない限り、その発達は非常に大きなダメージを受けることになる。

ところが、自閉症者の場合は、人間の子どもの群れの動きに従わせる本能的なメカニズムの解発機構に問題が生じたと考えられる。母の腕の中から離れ、自らの足で歩けるようになった頃に群れの動きから外れてしまったのである。

一方、群れにとどまることのできた子どもは、その発達は非常に有利になる。行動プランを自分でつくらなくても、行動を群れの動きに合わせていればいつのまにか群れの一員とし

での行動が具わってくるからである。

自閉症者はプログラミングが苦手である。しかし、これまでのような事情を考慮すると、それは無理ないことである。群れから外れて育った彼らは、いきなり私たちの社会の流儀にしたがって、自分のプログラムを作ることを要求されるのである。それだけに、遅くに私たちの世界に加わってきたのにもかかわらず、比較的よく育つことのできた自閉症者たちの努力はすごいものではないだろうか？ 彼らの話し方は私たちの話し方より論理的で、筋が通っている。よい条件で言葉を身につけられなかった彼らが、自分なりの努力で言葉を操る技術を身につけ言葉の論理から外れまいとして語るけなげな姿ではないだろうか？ 今の脳科学は、人間の脳の働きを「社会的な脳」として捉える方向へ向かっている。行動の方向が多様となった人間の内部には、自然によって与えられた絶対的な意志決定者は住まなくなった。代わりに、内部で行動をいくつも提案し、協議するシステムが作られた。このように同じ人間の中で複数の立場がとられるのは、私たちが多重人格的な性質を持っているおかげである。自閉症者は、自分が最初に打ち出した行動の方向の誤りに気づくことなく行動し続けることがある。つまり、いったん始めた行動にブレーキをかけたり、方向修正するのが苦手の人たちなのだ。

人間の脳は、実際の社会が人々をまとめ、動かすのに、指示する人間を必要とするのと同じように、内部に指揮官や議長にあたる部分を具えているにちがいない。自閉症者がよくパニックに陥ってしまうのはこのような部分がまだできあがっていないからだ。

「社会的な脳」は指示し、まとめる人がいて、妥当な結論を出すことのできる実際の社会のシステムを映し出しているにちがいない。

人間の子どもが、群れの中で生活していくうちに、このシステムを徐々に脳に写し込んできたように、自閉症者たちに対する私たちの教育的課題は、彼らを社会的な行動へ誘う中で、彼らの内側に次第に「脳における社会」を築いていくことである。そして、そうすることが私たちの立場として当然のことではないだろうか？

文献

玉井収介「自閉症」（講談社現代新書）

熊谷高幸「自閉症からのメッセージ」（講談社現代新書）

あとがき

「自閉症」とは、最初、精神的な問題からくる情緒障害である、と思っていた。しかし、調べていくうちに情緒障害ではなく脳の発達障害であることがわかった。私たちの目から見ると以上にも見える彼らの行動の理由が少しだがわかった気がする。よくわからない専門的な用語が出てきたりして調べていくのはしんどかったが、でも、その分、レポートを書き終えた今、かなり充実感を感じている。

これから、自閉症だけでなく、他の障害についても深く考えていきたいと思う。